

琉球大学学術リポジトリ

一般書としてのクリティカル・シンキング本の研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2011-11-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 道田, 泰司, Michita, Yasushi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/22272

一般書としてのクリティカル・シンキング本の研究

道田泰司*

A research about non-academic books of critical thinking

Yasushi MICHITA*

要 約

本研究では、一般書として売られているクリティカル・シンキング本がどのような内容を含んでいるのかについて、整理を試みた。その結果、日本で出版されている一般書としてのクリシン本の多くは、論理学系クリシン、心理学系クリシン、哲学系クリシン、そしてビジネス系ロジカル・シンキングの混合物であった。ただしこれら以外に、専門系クリシン、教育系クリシン、社会学系クリシンの本もみられた。これらから、現在は明示的に出版はされていないものの、さまざまな学問分野の考え方をベースとして、それを日常生活に活かそうとするクリシンがありうることも考察された。

背景と目的

世の中には、「クリティカル・シンキング」と銘打たれた本が多数出版されている。しかし、本によって扱われている内容がかなり異なる印象がある。そのような違いが生まれる可能性の一つとしては、扱っているクリティカル・シンキングの概念や定義が異なるから、というものであろう。しかし、学術論文におけるクリティカル・シンキングの概念を整理した道田(2003)を踏まえても、あるいは外国で出版されている一般書も含めて検討している道田(2001)を踏まえてこれらの本を見てみても、その違いが何に由来するのか、十分に整理することは難しい。

そこで本稿では、主に日本で出版されているクリティカル・シンキング本がどのような内容を含んでいるのかについて、整理を試みた。

なお筆者の印象では、欧米におけるクリシン本は、心理学者が書いたもの、論理学者が書いたもの、

の、哲学者が書いたものがあるように思える。それに加えて日本では、ビジネス書にある種独特なクリティカル・シンキングがあるように思われる。そこで検討にあたっては、論理学系クリティカル・シンキング、心理学系クリティカル・シンキング、哲学系クリティカル・シンキング、ビジネス系クリティカル・シンキング、という大まかな分類枠を念頭においた。ただし、これらの枠にはめ込むことのみが目的ではないので、このレベルで分類するだけではなく、それぞれの本がどのような概念を扱っているのかについて検討していく。また、その本が引用・参考している文献、ならびに筆者の出自、その本でクリティカル・シンキングをどう捉えているかも、その本の性質を知るための一助とした。

なお、「クリティカル・シンキング」という表記は長いので、クリシンという略記を使用することをここで断りしておく(クリティカル・シンキング本は「クリシン本」と略す)。

* 琉球大学教育学部教育実践学教室

方 法

本稿で対象としたクリシン本は、基本的にはamazon.co.jpの検索ボックスで、和書で「クリティカル シンキング」と入れて出てきたものとした。検索結果の並び順は、「キーワードに関連する商品」「売れている順番」「価格の安い順番」「価格の高い順番」「おすすめ度：」「出版年月が新しい順番」という6通りの並べ替えが可能である。今回、書籍を扱う順序として使えそうなのは、「キーワードに関連する商品」「売れている順番」「おすすめ度：」の3つであるが、出てきた内容を今回の目的に照らしてみたところ、最も妥当なのは「キーワードに関連する商品」と考え、基本的にはその順に検討していった。

またこれら以外に補足的に、アメリカのamazon.comでみられるクリシン本に関しても少しだけ検討を行った。

結 果

結果は、amazon.co.jpの検索で出てきた順に述べる。検索結果は、2011年4月13日に取得した。なお、過去半年間、折に触れて検索してみたが、大まかな印象としては、出てくる本は9割方重なっており、出てくる順位も8割方は同じであった。

1. 『[新版] MBAクリティカル・シンキング』(グロービス・マネジメント・インスティテュート, 2005)

「キーワードに関連する商品」でトップに出てくるのはこの本であった。なおこの本は「新版」となっているが、旧版は2001年に出されている。

編著者として書かれている「グロービス・マネジメント・インスティテュート」は、奥付によると「実践的な経営ノウハウの研究・開発」を行っている会社のようなものである。

参考文献としてあげられている本は、『新版 考える技術・書く技術』(ミント, 1999) や『問題解決プロフェッショナル』(斎藤, 1997) といったビジネス系ロジカル・シンキングの本、『論理学入門』(三浦, 2000) や『論理トレーニング』(野矢, 1997) といった論理学系の本、『クリティ

カル・シンキング (入門篇、実践篇)』(ゼックミスタ&ジョンソン, 1996/1997) や『クリティカル進化論』(道田・宮元, 1999) といった心理学系クリシン本の3種類のようなものである。

この本で扱われているクリティカル・シンキングとは、「健全な批判精神を持った客観的な思考」を「ビジネスパーソンが仕事を進めていくうえで役に立つ」点にフォーカスしたもののようである。また、ロジカル・シンキングとの違いとして、クリティカル・シンキングは論理的に考えることを一要素として包含しているものの、それだけでなく、前提の違いなども含めて考えたときに、「客観的にどう見ることがより妥当か」を意識し、考え続けることが重要と述べている。

では引き続き、各章の内容を確認していこう。

第1章は「論理展開」であり、「演繹的思考」「帰納的思考」が扱われている。ただしその扱われ方は、いわゆる論理学の本でのものとはかなり異なる印象を受ける。論理学の本で演繹というと、通常、記号論理学について論じられており、ここでは、妥当な推論(推論規則)が扱われる(これらの語は、三浦(2000)の目次で使われていたものである)。しかし本書ではそうではなく、むしろ、『新版 考える技術・書く技術』(ミント, 1999)においてピラミッド・ストラクチャーのなかで紹介されている演繹・帰納と同様の内容が論じられている。

ただし第1章第2節では「論理展開のチェックポイント」として、「隠れた前提」「論理の飛躍」といった、非形式的論理学(論理学系クリシン)的な概念が扱われている。また、「軽率な一般化」「不適切なサンプリング」も扱われている。この内容は、非形式的論理学で扱われることもあるし、また、心理学的クリシンのなかで心理学的研究法的な考え方が紹介されるときにも使われるものである。

第2章は「因果関係」であり、「因果関係と言える条件」、「因果関係の錯覚」(直観、第3因子の見落としなど)であり、錯覚の説明として「スキーマ」が使われている。これらは、心理学研究法をはじめとする心理学的クリシンといえる(因果関係といえる条件あたりは、非形式的論理学あたりでも扱いそうではあるが)。

第3章は「解く技術」であり、「MECE」「フレームワーク」「ロジックツリー」といった思考技術が説明されている。これらはビジネス系のロジカル・シンキングに特有の思考である。たとえば『ロジカルシンキングのノウハウ・ドゥハウ』(HRインスティテュート, 2008)では、3つの思考法として「ゼロベース思考」「フレームワーク思考」「オプション思考」を、3つのツールとして「ロジックツリー」「マトリックス」「プロセス」が扱われており、フレームワークとロジックツリーのところで、モレやダブリがないこと (MECE) について触れられている。このような概念は、論理学の教科書では決して出てこない概念であり、これらは単なる論理的思考 (ロジカルシンキング) というよりも、ビジネス系ロジカル・シンキング特有の概念と考えていいであろう。

第4章は「伝える技術」であり、「ピラミッド・ストラクチャー」を中心とし、「So What?」「Why? True?」という問いで論理をチェックすることが論じられている。ここはミント(1999)的であり、ビジネス系ロジカル・シンキング的といえよう。

第5章は「ケーススタディ」であり、ビジネスでの事例が扱われている。

以上より本書は、ビジネス系ロジカル・シンキングを中心として、論理学系クリシンや心理学系クリシンの要素が多少加味され、それらを合わせたものとして「ビジネス系クリシン」となっているようである。

2. 『クリティカルシンキング (入門篇)』(ゼックミスタ&ジョンソン, 1996)

この本はもともと1冊の本であったものを、『クリティカルシンキング (実践篇)』(ゼックミスタ&ジョンソン, 1997)との2分冊にしたものである。ここでは両者を扱う。本書は心理学者によって書かれたものであり、訳者も心理学者である。引用文献には、心理学の研究論文や概説書を中心に200本あまりが挙げられている。

第1章「クリティカルな思考とは何か、いかに学べばよいのか」では、哲学者デューイや心理学者グレイサーの述べる批判的思考の要素 (じっくり考えようとする態度+論理的な探究法・思考法

についての知識+それらを適用する技術) や、思考態度が挙げられている。ここは哲学系クリシンが含まれているといえるかもしれない。

第2章「ものごとの原因について考える」では、「必要原因・十分原因」という哲学的・論理学的概念のほか、因果関係を決定する規準として、共変、相関、第三変数といった心理学研究法的な概念、そして「原因-結果についての結論を下す際の落とし穴」として相関の錯覚、平均方向への回帰といった心理学概念、前後論法といった非形式的論理学的概念が、「真の因果関係を決定する方法」として一致法、一致と差異の併用法といった哲学・論理学的概念 (これらはJ. S. ミルが論理学の本の中で論じた方法である) などが挙げられている。

第3章「他人の行動を説明する」では、ケリーの立方体モデル、割引原理と割増原理、基本的帰属錯誤、ステレオタイプといった社会心理学の概念が挙げられている。

第4章「自分自身を省察する」では、自己奉仕バイアス、自己スキーマ、原因帰属スタイル、認知的不協和、自己モニタリング、自己効力感といった社会心理学の概念が中心に挙げられている。

第5章「信念を分析する」では、利用可能性ヒューリスティクス、代表性ヒューリスティクス、期待効果、自己成就予言といった心理学的概念 (主に認知心理学) が挙げられている。

訳書では「実践篇」となっている第6章「自分は何を知っているかを知る」では、メタ認知、スキーマ、モニタリング、機能的固着といった認知心理学の概念が挙げられている。

第7章「問題を解決する」では、問題解決、類推、下位目標分析、モニタリング、構えといった認知心理学の概念が挙げられている。

第8章「意志決定をする」では、意思決定モデル、あと知恵バイアスなどが挙げられている。

第9章「良い議論と悪い議論」では、演繹的議論と帰納的議論、議論の形式の妥当性、前提の容認可能性、誤った論法 (人身攻撃論法、先回り論法、二者択一の強制論法など) などが挙げられている。ここだけは、論理学系クリシン (形式的、非形式的論理学) が扱われている。

以上、本書は、ほとんどが心理学系クリシンで

あるが、論理学系クリシンについても1章さかれており、また、哲学系クリシンの思考態度についても多少触れられている本といえる。

3. 『3分でわかる クリティカル・シンキングの基本』(小川・平井, 2009)

本書は経営学の教授とマネジメントスクールの講師(経営コンサルタント)によって書かれている。文献としては、筆者が哲学的クリシンに位置づけている『クリティカル・シンキング』(ポール&エルダー, 2003)がよく引用されている。本書では思考を、「正しく疑う」クリティカル・シンキング、「正しく考える」ロジカル・シンキング、「正しく発想する」ラテラル・シンキングの3つに分けている。他書ではクリティカル・シンキングの中にロジカル・シンキングを含めていることが多いが、それとは考え方が異なっており、興味深い。

第1章は「クリティカル・シンキングとは何か?」であり、Paulの「クリティカル・シンキングをするために必要となる心構え」が紹介されている(知的謙遜、知的勇気、知的共感、知的誠実、知的忍耐、根拠に対する確信、知的自主性)。これはいわゆる、批判的思考態度のことであろう(たとえばPaul(1992)ではこれらのことを「心の性質」(traits of mind)と呼んでいる)。

第2章は「クリティカルに考えるためにロジカルを知る」であり、演繹法、帰納法、ピラミッド・ストラクチャー、イシュー・ツリーといったビジネス系ロジカル・シンキングが挙げられている。ただしそれだけではなく、後半は「ロジカル・シンキングの落とし穴」として、「論理的に正しいから失敗する」「そもそもの判断基準が間違っている」「単純な「A→B」の落とし穴」「分かった気になってしまう」の4つが紹介されている。ただしこれを見る限り、こちらで対象としているのはビジネス系ロジカル・シンキングではなく、「AならばB」という単純なロジックを対象としているように見える。

第3章は「クリティカルに考えるとは?」であり、弁証法、利益相反(囚人のジレンマなど)、因果の連鎖を丁寧に追いかける、「なぜ」を繰り返す、などが挙げられている。

第4章は「クリティカルに何をどう疑うのか?」であり、前提を疑う、因果関係を疑う(擬似相関など)、思考の幅を疑う、問題設定自体を疑う、先入観を疑う、などが挙げられている。

第5章は「クリティカル・シンキング訓練法」であり、三角測量法、見える化、ホワイトボードやポストイットの活用、などが挙げられている。

以上を見る限り、本書は、Paulの哲学系クリシンを基本にしつつも、それ以外に関してはさして体系性があるわけではなく、筆者らの知識や経験を中心に、既存のロジカル・シンキングなどについても疑いをはさみつつ論じている印象である。その意味では本書は、哲学系クリシン風味の小川・平井流クリシン、と呼んでも差し支えないのではないだろうか。

4. 『クリティカル・シンキング集中講座—「問題解決力」を短時間でマスター』(芳地 一也, 2010)

本書の著者は、ビジネス系クリシンの講座なども開設しているグロービスで講師も行っているようである。また「すごい会議」というコーチング手法を使った企業サポートもされている。なお本書には参考文献リストはない。

「はじめに」によると本書におけるクリティカル・シンキングとは「みずから疑問文をつくってそれに答えを出す」ことであり、「最後まで考え抜いて自分で答えを出すという意味」とある。

第1章は「クリティカル・シンキングとは何か?」であり、「疑問文をつくって考える習慣をつける」ことの大事さが述べられている。

第2章は「成功を手に入れる問題設定の方法」であり、解決する価値のある問題を見つけるために、ワークシートを使って理想の自分イメージを描き、自分自身の改善点をチェックすることで自己診断することが述べられている。筆者の印象であるが、批判的思考に関する学術文献や、クリティカル・シンキングのごく一般的な一般書を基準に考えたときには、ここの部分はクリティカル・シンキングの本というよりもコーチングやファシリテーションの本を読んでいるようであった。

第3章は「問題を解決するための手立て」であり、効果的な疑問文のつくり方と、問題解決のス

テップについて述べられている。

第4章は「クリティカル・シンキングを補助する思考技術」であり、「MECE」、「ロジックツリー」、「フレームワーク」というビジネス系ロジカル・シンキングの代表的なツールが、章タイトルにあるように、クリティカル・シンキングを補助する思考技術として紹介されている。

以上、本書は、「疑問文をつくって考える」というクリティカル・シンキングを出発点として、前半がコーチング的、後半がビジネス系ロジカル・シンキングの手法でそれを解決へと導いていく、というスタイルの本であった。それは大きくまとめるならば、ちょっと風味の異なるビジネス系クリシン本と呼べるであろう。

5. 『クリティカルシンキング（実践篇）』（ゼックミスタ&ジョンソン, 1997）

これについては2で論じているため、ここでは論じない。

6. 『MBAクリティカル・シンキング』（グロービスマネジメントインスティテュート, 2001）

これは1の旧版であり、内容に大きな改変はないため、ここでは省略する。

7. 『通勤大学MBA〈3〉クリティカルシンキング』（グローバルタスクフォース, 2002）

本書の著者となっているグローバルタスクフォースは、MBA同窓生組織の日本現地法人であり、MBAホルダー採用支援、MBA出向サービス、教育・研修事業などを手がけているようである。監修者として名前の挙がっている青木倫一氏は、ハーバード大学ビジネススクールに留学し、慶應義塾大学ビジネススクールの教授である。

本書の参考文献としてあげられているのは、『MBAクリティカル・シンキング』（グロービスマネジメントインスティテュート, 2001）といったビジネス系クリシン本、『新版 考える技術・書く技術』（ミント, 1999）や『問題解決プロフェッショナル』（斎藤, 1997）といったビジネス系ロジカル・シンキングの本などである。

本書ではクリティカルシンキングを「物事を客観的、論理的に考え、それを相手にわかりやすく

伝えるための思考法」、「自分の考えを常に批評しながらより深く物事を考えていくこと」（p.18）と述べている。

本書の第1部は「論理の基礎」と題して4つの章が収められている。第1章は「クリティカルシンキングとは」であり、上記の定義や、クリティカルシンキングを行うことのメリットなどについて述べられている。第2章は「ゼロベース思考」で、いかに既存の枠や過去の経験にとらわれずに冷静な判断をするべきかについて述べられている。それはたとえば、常識を疑うこと、相手の立場に立って考えること、逆の発想をしてみることなどである。第3章は「論理展開の二つのタイプ—演繹法と帰納法」であり、演繹、帰納、説得的な説明について述べられている。第4章「その他のクリティカルに考えるにあたり心がけておくこと」であり、WHYを繰り返すことの重要性、失敗から学ぶこと、因果関係を考える上での留意点、仮説思考のやり方、などについて述べられている。

第2部は「論理の整理」と題して2つの章からなっている。第5章は「MECE—モレなくダブリなく」であり、MECEの考え方や事例、モレやダブリがあるケースについて論じ、MECEを用いて情報を整理する方法について書かれている。第6章は「フレームワーク思考」で、MECEで表現されている既存のフレームワークである3C、マーケティングの4P、SWOT分析など15種類のものが紹介されている。

第3部では「アウトプットでの活用」と題して2つの章からなっている。第7章は「ロジックツリー」で、MECEを使って上位概念を下位概念に分解する「ロジックツリー」を用いて、原因追究と問題解決を行うことが説明されている。第8章は「ピラミッド構造」で、論理的な文章を書くためのピラミッド構造について、ミント(1999)をベースとした説明がなされている。

以上、本書は、著者にせよ、参考文献にせよ、扱われている内容にせよ、典型的なビジネス系クリシン本ということができよう。すなわち、ビジネス系ロジカル・シンキングを中核として、その他のクリシンの考え方（論理学系クリシンなど）が加味された本である。

8. 『クリティカル・シンキング』（岡本義行・江口夏郎, 2007）

第一筆者は経済学者、第二筆者はビジネススクールを修了後、企業の人材育成をサポートする会社を行っているようである。

本書の参考文献は一風変わっている。デカルトの『方法序説』、クーンの『科学革命の構造』、社会学者木下康仁の『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践』など、学術書（しかも、一見クリティカル・シンキングとは直接関係のない）が並んでいる。

本書ではクリティカル・シンキングを「過去の慣習や権威などに惑わされることなく、ものごとの本質を見極め、論理的に思考すること」と定義しており、クリティカル・シンキングを実践するためには「ものごとを批判的に見る習慣」と「論理的に思考する能力」が必要と述べている（p.1）。

では本書の章構成を見てみよう。第1章は「考えること」で、多面的に考えること、論点（イシュー）を設定すること、ロジックツリーの要素に分解すること、演繹的推論と帰納的推論、およびそれらと関わる誤謬、隠れた前提、などについて論じている。

第2章は「分解すること」で、一致差異併用法などを用いて因果関係を見極めること、ロジックツリーとMECEなどを用いて体系化すること、事実をグルーピングして上位メッセージを見出すなどしてKJ法的に構造化すること、フレームワークという定石を用いること、などについて述べられている。

第3章は「チェックすること」で、確証バイアスなどに陥らずに仮説を検証すること、比較をすることでよりよく理解すること、ロジックツリーなどを使って整合的に考えること、MECE的に考えることで網羅性を確保すること、などについて述べられている。

以上、本書は、参考にされている本は科学哲学や科学の方法論の本が多く一見変わっているように見えるが、論じられている内容はロジックツリー、MECE、フレームワークなど、ビジネス系ロジカルシンキング、あるいはビジネス系クリシン本の系譜に位置づく本であり、その説明の端々に学問的・科学的説明が用いられている本といえよう。

9. 『クリティカル・シンキング―「思考」と「行動」を高める基礎講座』（ポール&エルダー, 2003）

本書の第一著者は哲学者であり、長年にわたってクリティカル・シンキングの教育と研究を先導してきている一人である。本書は、17章からなる原著のうちの7章を訳した抄訳である。なお本訳書には参考文献リストは挙げられていない。

本書は、他書とかなり傾向が異なるため、ある程度の紙幅を用いてその内容について整理していく。

序章においてはクリティカル・シンキングについて、次のように述べられている。

- ・クリティカル・シンキングは、どんな状況においても、可能な限り状況にあった考え方ができることを身につける訓練です。一般的に言えば、考える目的は「状況を見極める」ことです。（p.10）
- ・私たちはよくない思考習慣を身につけていて、……よくない考えについて洞察力を磨けば、私たちは人生の室を高めることができます。（p.12）
- ・クリティカル・シンキングは通常の思考のもとに、第2段階的な思考をすることです。（p.17）
- ・クリティカル・シンキングとは一口で言ってしまえば、自分で方向づけを行い、自己鍛錬を重ね、自分で自分の思考をチェックし、修正を行っていくという行為です。（p.20）

以上の記述より、筆者らは、我々は不適切な思考習慣を持っており、それを意識的にチェックして改善することがクリティカル・シンキングと考えていることが分かる。

第1章は「公平な視点(立場)で考えられるようになること」であり、Paulのいう「強い意味のクリティカル・シンキング」と「弱い意味のクリティカル・シンキング」について述べられている（この両者については、道田(2005)参照のこと）。強い意味のクリティカル・シンキングとは公平な方向でクリティカル・シンキングのスキルを使うということであり、弱い意味のクリティカル・シンキングとは、自己中心的な方向でクリティカル・シンキングのスキルを使うということである。ク

リティカル・シンキングのスキルはどちらの目的のためにも使うことが可能であるが、望ましいクリティカル・シンキングとは、強い意味のクリティカル・シンキングである。本章では、強い意味のクリティカル・シンキング、すなわち公平な考え方をするための態度として、7つの知的美德について説明されている。7つの知的美德とは、以下のものである。

- ・ 知的謙遜（知らないということを認識する）
- ・ 知的勇気（あえて意見を見直す）
- ・ 知的共感（相対する視点を受け入れる）
- ・ 知的誠実（ほかの考えに対しても自分と同じ判断基準を用いる）
- ・ 知的忍耐（複雑な状況や挫折感を乗り越える）
- ・ 根拠に対する自信（正当な根拠はそれだけの価値があることを認識する）
- ・ 知的自主性（独自に考えられること）

このような態度的な側面から始められるクリティカル・シンキング本は珍しい。このような本を筆者は、哲学系クリシン本と考えている。

第2章は「思考のメカニズム」であり、思考の要素（思考の原理）である「目的、問題点、結論、事実、想定、概念、結果、視点」などを知り、それらを区別し、実際の議論を分析できるようになることの必要性について語られている。筆者の個人的印象としては、伝えようとしていることが非常に分かりにくい章である。

第3章「思考の基準」であり、思考を判断する基準としての「明瞭さ、的確さ、正確さ、妥当性、深さ、幅、重要性、公平さ」について説明されている。またこれらの基準と、先の思考の各要素の関連付けも行われている。たとえば「目的」でいうと、目的を評価する基準は明瞭さ、重要性、達成度、一貫性、正当性であり、きちんと理由づけを行うためには、目的をきちんと理解し、公平に考える必要がある(p.119)という具合である。

第4章は「決断する」であり、決断を行うための4つの鍵などについて説明されている。4つの鍵とは、重要な決断に直面しているという認識、代替案の発見、代替案の評価、代替案の行動化、である。また、意思決定を行う際に注意すべき点などについて説明されている。

第5章は「問題解決」であり、問題解決のステッ

プ（目標、問題の分析、情報収集、情報の評価、選択肢の評価、方略的アプローチ、モニター）について述べられている。また、問題解決の落とし穴や、思考の原理との関連についても述べられている。

第6章「非理性的な傾向を克服する」であり、非理性的な思考としての自己中心性について述べられている。自己中心性にはさまざまなものがあるが、支配的な自己中心性と服従的な自己中心性、自己中心的でない理性的な思考として他人の立場がわかること、などについて述べられている。

第7章は「方略的思考」であり、方略的に考えるための方策について書かれている。方略的に考えるには、その前にまず、「知性の機能の原則を理解」することが必要であり、方略的に考える上では、その理解を使う必要がある。ということで本章では、人間の性質と、それを踏まえた方略が述べられている。人間の性質などについてはKEY IDEAという形でまとめられている（なかにはそうでないものもあるが）。たとえば最初のものは、「思考、感情、願望は互いに関連しあっている」というものである。ここから、非理性的な感情を見つけ出し、その感情を引き起こした考えを吟味し、理性的な反応について考える、という方略が生まれる。以下、挙げられているKEY IDEAと方略を列記してみよう。

- ・ すべてにロジックがある
 - 相手の考えているロジックを知ることによって焦点を当てる
- ・ 質の高い思考のために評価を習慣づけよう
 - 思考の明白さ、正確さ、適切さなどの観点で評価する
- ・ 潜在的な自己中心性が邪魔をする
 - 「自分の目的や目標を分析する」などの方略を使いながら、内なる声を聞く
- ・ 自己中心性に敏感になれ
 - 自己中心的な人との関係から抜け出せる道を探す
- ・ 私たちは体験を過剰に一般化しやすい
 - 自己中心性の具体例についてよく知り、自分の人生についての事実リストを作る
- ・ 自己中心性は理性という仮面をかぶっている
 - このことを認識することで、何らかの方

策を施す

- ・自己中心性にはパターンがある
→私たちの心が陥るパターン（挑戦的、逃避的、否定的、合理化など）と方略を学ぶ
- ・支配的な態度、ときに服従的な態度で、力を得ようとする
→日常生活の中で自己中心的な支配と服従が果たす役割を認識し、そのような行為を観察し、変えていくステップとする
- ・人間はもともと自分か中心的な動物である
→このことを認識し、分析し、評価し、改善につなげる
- ・理性の訓練には忍耐が要る
→理性的思考能力を身につけるためには毎日の訓練が欠かせない

以上のことから分かるのは、「方略」といっても、個別具体的、マニュアル的なものを目指しているわけではなく、要は、自分自身や相手、人間のことを理解し、分析と訓練を通してそれに対処していかななくてはならないと繰り返し述べているわけである。このあたりの考え方は、たとえば論理学系クリシンとはかなり異なっている印象を受ける。

本章の端々に見られるのは、「人間の心には非理性的に傾く傾向がある一方、本能的に理性をも求めます」(p.217)、「人間は生まれつき自己中心的であり、ほとんどの人がその克服法に気づいていないので、まずは自己中心的考えに気づく力をつけることが大切です」(p.220)、「自己中心性のロジックを理解し見つけ出すには訓練が必要です」(p.221)という考え方である。要するに、「人は本来的に自己中心的な部分を持っており、それは訓練によってしか改善されない」という考えである。このあたりの考え方は、プラトンのイデア論ではないが、現実（人間）は不完全なものであり、理想的なものを求めていかなければいけない、という考えが背後にあるように思われる。

以上、ポールとエルダーの本の各章について概観してきたが、ここで目指されているのは、先にも述べたように、論理学系クリシンのように正しい型（マニュアル的なもの）を学ぶことではなく、本来どうあるべきかについての議論であり、その

意味で哲学系クリシンと呼ぶことができよう。挙げられている方略も、個別のスキルのなものではなく、むしろ考え方や態度に重点が置かれているように思われる。

10.『クリティカル・シンキング練習帳』（M・ニール・ブラウン、スチュアート・M・キーリー、2004）

本書の著者のプロフィールは、本書にも、原著（Browne & Keeley, 1998）にも書かれていないので詳細は分からないが、第一筆者は、Bowling Green State Universityの本人のページ（http://www.business.bgsu.edu/faculty_staff/browne/）によると経済学者である。第二筆者は、Keeley, et al. (1998)によると心理学者である。本書には参考文献リストはないが、本文中には、ポールの「強い意味／弱い意味の批判的思考」について触れられている。以下、訳書の記述を元に述べていく。

まえがきでは「クリティカル・シンキング（批判的思考法）」とは、さまざまな議論を、明白かつ合理的な基準にのっとって、体系的に評価する技法」（p.1）と述べられている。序章では、批判的な問い（クリティカル・クエスチョン）を行うことで、問題の本質をつかみ、情報を得て（正しい答えではないにせよ）最良かつ妥当な答えを導き出すことの重要性について述べられている。

第1章以下は、各章タイトルが「クリティカル・クエスチョン」になっている。第1章は「問題および結論は何か?」、第2章が「理由は何か?」、第3章が「どの語句が曖昧か?」、第4章が「価値対立と前提は何か?」、第5章が「記述前提は何か?」となっており、これらの問いを通して「議論を理解」するやり方が紹介されている。さらに補足するならば、ここで行われているのは、まず、問題、結論、理由を明らかにすることで議論の基本構造を明らかにすることである。これそのものはクリティカル・シンキングではないが、その前提といえる。そのうえで、曖昧な語句や筆者が持っている前提を問う、という「クリティカル・シンキングの具体的な道具」（p.60）を用いることで、議論をより明確に理解することが目指されている。

第6章以降は、「議論を評価する」ことに主眼

が置かれている。第6章は「推論の誤りはないか？」で、非形式論理的な虚偽推論が紹介されている（言葉のすり替え、語義曖昧の虚偽、疑わしい権威へのアピールなど）。第7章は「証拠は十分か？」という問いで、直感、権威へのアピール、推薦、個人的観察、ケーススタディ、研究調査、類推の証拠能力について論じられている。第8章は「対抗原因はあるか？」で、他の説明可能性を考えることについて述べられている。第9章は「統計に偽りはないか？」で、統計情報の読み方や留意点が説明されている。第10章は「どんな重要情報が省かれているか？」で、省かれている情報を突き止める方法などについて書かれている。第11章は「どんな論理的結論が可能か？」で、二分法思考に陥らずに、前提条件などを考えながら多様な結論を導き出すやり方が説明されている。

以上、本書は、基本的な枠組としては論理学系クリシン本といえる。というのは本書は、野矢(1997)や齋藤・中村(1999)のような、非形式的論理学をベースに日常の議論について考えていくやり方を紹介している本と同じく、議論の構造を押さえた上で、暗黙の前提を念頭に置きつつ、形式的・非形式的な誤謬推論に陥らずに正しく考える方法について述べられているからである。ただしボールの強い意味／弱い意味の批判的思考について触れられており、哲学系クリシンも念頭に置かれていると考えることができそうである。

11. 『世界一やさしい問題解決の授業』(渡辺, 2007)

本書の著者は、ハーバードビジネススクール卒業後、マッキンゼー・アンド・カンパニー（コンサルティング会社）に勤めていた人である。

本書は、ここまで見てきた本のなかで初めて、タイトルに「クリティカル・シンキング」やそれを匂わせる語が用いられていない本であるが、しかしあとがきで、本書で扱っている問題解決能力に似たものとしてクリティカル・シンキングについて言及されている。また本書で扱っているものについては、まえがきで「考え抜く技術」と書かれている。なお本書に参考文献リストはない。

では本書の内容を見ていこう。なお本書は中学生（以上）を対象にしており、「章」ではなく、

中高の時間割のように「○限目」と表現されている。

1限目は「問題解決能力を身につけよう」で、自分で考えて行動することの大切さが説かれ、問題解決のためには「漠然とした問題や、途方にくれそうな大きな問題でも、じっくり原因を見極め、小さな問題に分解し、一つずつ解いていけばいい」(p.23)として、「分解の木」というツールが紹介されている。これはビジネス系クリシンでいうところの「ロジックツリー」である。

2限目は「原因を見極め、打ち手を考える」で、仮定の事例に対して、原因究明や解決策策定に分解の木を使って考えられる原因や解決策を幅広く洗い出し、分析やプラン作成を行うプロセスが説明されている。使うツールとしては分解の木のほかに、分析のための「課題分析シート」、解決プラン選択のための「マトリックス」（複数のプランを、「効果の高さ」と「実行のしやすさ」の二次元平面上にプロットするもの）が使われている。

3限目は「目標を設定し、達成する方法を決める」で、別の仮定事例に対して、ギャップ分析、分解の木、仮説の木（ピラミッド構造のようなもの）、課題分析シート、マトリックスなどを使って解決が試みられている。

以上、本書は、筆者のバックグラウンドを見ても、使われているツールをみても、ビジネス系クリシン本ということができよう。

12. 『クリティカル進化論』(道田・宮元, 1999)

本書の筆者は心理学者であり、巻末の読書案内には、心理学系の本が中心で紹介されているが、それ以外にも論理学の入門書、統計の本、社会学者の本なども紹介されている。

本書の序章ではクリティカル・シンキングを「何事も無批判に信じこんでしまうのではなく、問題点を探し出して批評し、判断すること」(p.10)と定義づけられている。また序章で、議論＝「理由→結論」という、非形式論理的な枠組みが提示されている。

第1章は「推論の仕方は妥当か」で、一致差異併用法などの科学的思考法、前後論法などの非形式的誤謬推論について説明されている。

第2章は「根拠としての「事実」は正しいか」

で、スキーマ（枠組み）という心理学概念を軸に、人の誤りやすさやステレオタイプ視の問題点などが説明されている。

第3章は「クリティカルシンカーへの道」で、哲学系クリシンで重視されているような思考態度などについて説明されている。

以上、本書は、心理学系クリシンがベースにあるものの、論理学系クリシンや哲学系クリシンについても同程度に扱われている本ということができよう。

13. その他のクリシン本

ここまでは、amazon.co.jpの検索結果順に詳細に検討してきたが、ここからは、これまでに見てきた枠組み（ビジネス系／心理学系／論理学系／哲学系クリシン）に納まらなさそうなものを中心にいくつかをピックアップし、概略をごく大まかに見ていくことにする。

『クリティカルシンキング—研究論文篇』（メルツォフ, 2005）は、実証研究を進めていく上で必要なクリティカル・シンキングについて論じている本である。広い意味では論理学系クリシン本といえるが、サンプル、交絡変数、内的妥当性など、実証研究に特有のクリティカル・シンキングに限定して述べられている。

この本と同様に、看護場面（ルーベンフェルド & シェッファー, 1997など）、保育場面（谷川, 2003）に焦点を当てたクリシン本が出されている。これらは、研究場面、看護場面、保育場面など特定の専門分野で使われることが念頭に置かれており、「専門系クリシン」と呼ぶのが妥当かもしれない（もっとも谷川(2003)は、さほど専門性が強いわけではなく、非専門系クリシンを保育場面を例として紹介した、という域を出ていないように見えるが、「どのような場面に焦点を当てているか」という観点から、いちおう専門系クリシンと位置づけた）。

『クリティカル・シンキングと教育』（鈴木・竹前・大井, 2006）は、クリティカルに読む、書く、ディベートするなど、いかにクリティカル・シンキングの教育を行うかに焦点を当てている。このほかにも同様のものとして、学校教育での育成に焦点を当てた柴田(2006)の『批判的思考力を

育てる—授業と学習集団の実践』がある。これらは「教育系クリシン」と呼べそうである。

『日常生活のクリティカル・シンキング—社会的アプローチ』（木村, 2006）は、社会学をベースにしたクリティカル・シンキングであるので、「社会学系クリシン」と呼べそうである。同様の本として、『知的複眼思考法』（荻谷, 1996）がある。同書は、クリティカル・シンキングという語がタイトルには表されていないが、「批判的に読む」「批判的に書く」「問いを立てる」ということが中心となっており、クリシン本の一つということも可能である。

14. アメリカにおけるクリシン本

amazon.comで、同じように"books"カテゴリで「critical thinking」を検索し、検索結果を「キーワードに関連する商品」で並べ替え、上位のものの概要、カスタマーレビュー、分類されているカテゴリを検討してみた。

その結果、上位12位までの書籍のほとんどが非形式的論理学を中心とした、大学の批判的思考の教科書であった（例外は、小学生を対象としている本とPaulらの著作であった）。24位までも同様であり、「売れている順番」で並べ替えても似たような感じであった。

試みに「なか見検索」(LOOK INSIDE!)の可能な本を何冊か選んで、目次を見てみたが、ビジネス系クリシンの項目立ての本は見あたらなかった。また、「MECE」や「logic tree」で本文の検索も行ったが、ヒットするものはなかった。

なお、日本のビジネス系クリシン本によく出てくるのはバーバラ・ミンツの『考える技術・書く技術』であり、amazon.co.jpでも、「この商品を買った人はこんな商品も買っています」では、ビジネス系クリシンが出てくる。そこで同様にamazon.comで、原著("The Minto Pyramid Principle: Logic in Writing, Thinking, & Problem Solving")のページで、"Customers Who Bought This Item Also Bought"の欄を見たが、タイトルに"thinking"とある思考関連の本は、約100冊中2冊しかみられなかった。

以上の結果から見る限り、アメリカでは「ビジネス系クリシン本」というのは、ないか、あった

としても、日本のように売れているわけではないようである。そして、ロジック・ツリーやMECE、バーバラ・ミント本を元にした「ビジネス系クリシン」というのは、日本独特のジャンルである可能性があるといえそうである。

考 察

クリシンの分類

本稿冒頭で便宜的に、論理学系クリシン、心理学系クリシン、哲学系クリシン、ビジネス系クリシンという分類を行った。これまでの検討の結果、多くのものはこの枠組に収まるようであった。ただしこれですべてというわけではない。

まず、ビジネス系クリシン本の中に含まれているのは、論理学系クリシン、心理学系クリシン、哲学系クリシン、ならびにビジネス系ロジカル・シンキングであった。したがって、ビジネス系クリシンとは、これら4つの複合体ということができそうである。そしてそれは、アメリカのamazon.comの検索結果から見る限り、日本独特のクリシン概念といえそうである。

その他のクリシンとしては、13位以下で概観した本より、「専門系クリシン」「教育系クリシン」「社会学系クリシン」といえるものがあつた。専門系クリシンは特定の専門に特化されたクリティカル・シンキング、教育系クリシンは教師としてクリティカル・シンキングを育成することに焦点が当てられたクリティカル・シンキング、社会学系クリシンは社会学をベースとしたクリティカル・シンキングである。

なお、上に挙げたものも、それぞれ論理学、心理学、哲学という専門分野をベースにしているので、専門系クリシンと呼べそうだと思うかもしれないが、ここの分類ではそうではない。論理学系、心理学系、哲学系、そして社会学系クリシンは、特定の専門分野の知見や考え方を、「日常生活を対象に」活かそうとしたものである。つまり大きく言えば、これらは「非専門系クリシン」である。それに対して専門系クリシンとは、クリティカル・シンキング的な考えを「特定の専門分野を対象に」活かそうとしているものである。すなわち、どのような領域に活かそうとしているかとい

う点が、両者の違いである。

もう一点、「社会学系クリシン」というものの存在から考えられることについて述べておこう。ここからいえるのは、クリティカル・シンキングとは論理学や心理学や哲学の独占物ではないということではないだろうか。社会学は、定義的にいうならば、人々の間の関係のあり方や組織や制度といった、まさに「社会」現象の解明を目指す学問であるが、そこで行われていることは、「当たり前」に疑問をむけることである（荻谷・濱名・木村・酒井, 2000）。その意味で、現在社会学系のクリシン本はあまり見られないが、しかし社会学は実は、クリティカル・シンキングときわめて親和性の高い学問といえそうである。

これはもっというならば、あらゆる学問、あらゆる科学にいえることかもしれない。というのは、そもそも学問とは、「根拠を示すことによって同意を獲得しようとする営み（言語ゲーム）」（西, 2001, p.60）である。そこでは同意を獲得するために、厳密な方法論なり透明性の高いデータなり妥当な推論なりを積み重ねられている。またそこで対象とされるのは多くの場合、我々が日常的に素朴に思い込んでいる事柄や気づいていない事柄であろう（我々が当然のことと気づいていることをそのまま検証することは、学問の対象とはなりえないであろうから）。このように、我々の思い込みや見えていないものを対象にしている点も、厳密な論理を積み重ねようとしている点も、いずれも、とてもクリティカル・シンキング的といえる。ということは、現在は表だって銘打たれているものはないが、さまざまな学問分野の考え方をベースとして、それを日常生活に活かそうとするクリシンは、いくらでもできそうである。思いつきで挙げるなら、経済学系クリシン、言語学系クリシン、物理学系クリシン、歴史学系クリシン、臨床心理学系クリシンなどなど...

このようなクリシンが今後現れる可能性は大いにあるが、その一方で、日本（あるいはアメリカ）で出版されている本の現状から見る限り、クリティカル・シンキングの中核に位置しているのは、論理学系クリシン、心理学系クリシン、哲学系クリシンの3つと言ってよさそうである。さらにこれらの関係を位置づけるならば、論理学系クリシン

と心理学系クリシンはツールや知識という点で直接的に我々のクリティカル・シンキング行動を方向づけているのに対し、哲学系クリシンは態度や考え方であり、直接的に我々のクリティカル・シンキング行動を方向づけるというよりも、クリティ

カル・シンキングのツールや知識を根底から支えるもの、と考えるのがいいかもしれない（図1）。そう考えるならば、哲学系クリシン本が少ない理由も頷けるのではないだろうか。

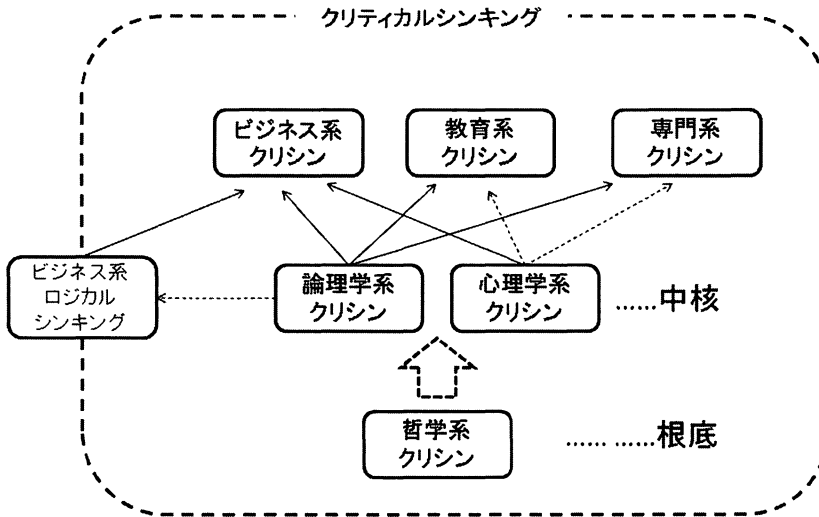


図1 いろいろなクリティカルシンキングの関係

各クリシンで扱われている内容の整理

では次に、最初に詳しく取り上げた10冊の本を対象に、それぞれのなかに論理学系クリシン、心理学系クリシン、哲学系クリシン、その他のクリシンがどのように含まれているかについて検討する。具体的には、どのような要素が含まれているかということであり、それについては、表で整理を行った（表1）。

その結果、ほとんどの要素が、論理学系クリシン、心理学系クリシン、哲学系クリシン、ビジネス系ロジカル・シンキングという枠組に収まった。その他のクリシンとせざるを得なかったのは、質的研究法（三角測量法）、ファシリテーション的な考え方（見える化など）、疑問文を作る、という基本的なものであった。

以上のことから、日本で出版されている一般書としてのクリシン本の多くは、論理学系クリシン、心理学系クリシン、哲学系クリシン、そしてビジネス系ロジカル・シンキングの混合物といえそうである。そしてそれぞれの本の違いを特徴付けるのは、それらが含まれる割合の違いであり、

著者の考え方のバックグラウンドの違いであり、クリティカル・シンキングのどのような側面を強調するのか、という違いと言えよう。

なお、それぞれのクリティカル・シンキングがどのような側面を強調しているのかについて、これまでの検討の中で筆者が得た感触について記しておく。

- ・ビジネス系クリシン……まずは全体を網羅的に見渡すべき
- ・論理学系クリシン ……議論の骨格をつかまえて考えるべき
- ・心理学系クリシン ……人は誤った見方や偏った見方をしがち
- ・哲学系クリシン ……公正に考え続けようという態度を重視すべき

これらは、あくまでも感触であるので、本当にそうなのかについては、今後詳細に検討していくべきであろう。

表1 各クリシン本の構成要素

	論理学系クリシン	心理学系クリシン	哲学系クリシン	その他のクリシン	ビジネス系ロジカル・シンキング
『[新版] MBAクリティカル・シンキング』	隠れた前提, 非形式的論理的誤謬	不適切なサンプリング, 心理学的研究法, 錯覚とスキーマ			ピラミッド・ストラクチャー, MECE, フレームワーク, ロジック・ツリー
『クリティカルシンキング (入門篇・実践篇)』	一致と差異の併用法, 非形式的論理的誤謬, 形式論理学	心理学研究法, 相関の錯覚, ステレオタイプ, バイアス, ヒューリスティクス, メタ認知・スキーマ, 問題解決	じっくり考えようとする思考態度		
『3分でわかる クリティカル・シンキングの基本』		疑似相関	知的謙遜な批判的思考態度, 弁証法	三角測量法, 見える化	ピラミッド・ストラクチャー, イシュー・ツリー
『クリティカル・シンキング集中講座』				ファシリテーション, 疑問文を作る	MECE, ロジック・ツリー, フレームワーク
『通勤大学 MBA (3) クリティカルシンキング』			常識を疑う, 相手の立場に立って考える, 逆の発想をしてみる		MECE, フレームワーク, ロジック・ツリー, ピラミッド・ストラクチャー
『クリティカル・シンキング』(岡本・江口)	一致差異併用法	確証バイアス	批判的に見る習慣		ロジック・ツリー, MECE, フレームワーク
『クリティカル・シンキング』(ポール&エルダー)		問題解決の落とし穴	公平な視点としての7つの知的美德, 思考の基準, 自己中心性		
『クリティカル・シンキング練習帳』	クリティカル・クエスチョンによる議論の理解と評価, 非形式的論理的誤謬		強い/弱い意味の批判的思考		
『世界一やさしい問題解決の授業』					分解の木, 課題分析シート, マトリックス, 仮説の木
『クリティカル進化論』	議論=理由→結論, 非形式的論理的誤謬	スキーマ, 人の誤りやすさ	思考態度		

引用文献

- Browne, M. N. & Keeley, S. M. (1998) *Asking the right questions: A guide to critical thinking* (5th ed.) NJ: Prentice Hall.
- ブラウン, M. N. & キーリー, S. M. 森平慶司 (訳) (2004) クリティカル・シンキング練習帳 PHP研究所.
- グローバルタスクフォース (2002) 通勤大学MBA (3) クリティカルシンキング 総合法令出版.
- グロービス・マネジメント・インスティテュート

- (2001) MBAクリティカル・シンキング
ダイヤモンド社.
- グロービス・マネジメント・インスティテュート
(2005) 新版 MBAクリティカル・シンキ
ング ダイヤモンド社.
- 芳地一也 (2010) クリティカル・シンキング集
中講座 「問題解決力」を短期間でマスター
アспект.
- 荻谷剛彦 (1996) 知的複眼思考法 講談社.
- Keeley, S. M., Ali, R., & Gebing, T. (1998).
Beyond the sponge model: Encouraging
students questioning skills in abnormal-
psychology. *Teaching of Psychology*, 25, 270-
274.
- 木村邦博 (2006) 日常生活のクリティカル・シ
ンキング—社会学的アプローチ 河出書房新
社.
- HRインスティテュート (2008) ロジカルシン
キングのノウハウ・ドゥハウ PHP文庫.
- メルツォフ, J. 中沢 潤 (監訳) (2005) クリテ
ィカルシンキング—研究論文篇 北大路書房.
- 道田泰司・宮元博章 (1999) クリティカル進化
論—『OL進化論』で学ぶ思考の技法— 北
大路書房.
- 道田泰司 (2001). 批判的思考の諸概念—人は
それを何だと考えているか?— 琉球大学教
育学部紀要, 59, 109-127.
- 道田泰司 (2003). 批判的思考概念の多様性と
根底イメージ 心理学評論, 46, 617-639.
- 道田泰司 (2005) 強い意味の批判的思考に関す
る覚書 琉球大学教育学部紀要, 66, 75-91.
- ミント, B. 山崎康司 (訳) (1993) 考える技
術・書く技術—問題解決力を伸ばすピラミ
ッド原則 ダイヤモンド社.
- 三浦俊彦 (2000) 論理学入門—推論のセンスと
テクニクのために NHKブックス.
- 西 研 (2001) 哲学的思考—フッサール現象学
の核心— 筑摩書房.
- 野矢茂樹 (1997) 論理トレーニング 産業図書.
- 小川 進・平井孝志 (2009) 3分でわかる クリ
ティカル・シンキングの基本 日本実業出版
社.
- 岡本義行・江口夏郎 (2007) クリティカル・シ
ンキング (ライトワークスビジネスベーシッ
クシリーズ) ファーストプレス.
- Paul, R. W. (1992). Critical thinking: What, why,
and how. *New Directions for Community
College*, 77, 3-24.
- ポール, R. & エルダー, L. 村田美子・巽由佳
子 (訳) (2003) クリティカル・シンキン
グ—「思考」と「行動」を高める基礎講座
東洋経済新報社.
- ルーベンフェルド, M. G. & シェッフアー, B. K.
(著) 中木高夫・石黒彩子・水溪雅子 (監
訳) (1997) クリティカルシンキング—看護
における思考能力の開発— 南江堂
(Rubenfeld, M. G. & Scheffer, B. K. (1995)
*Critical thinking in nursing: An interactive
approach*. Philadelphia: Lippincott-Raven
Publishers.)
- 齋藤嘉則 (1997) 問題解決プロフェッショナル
—思考と技術— ダイヤモンド社.
- 齋藤了文・中村光世 (1999) 「正しく」考える
方法 晃洋書房.
- 鈴木 健・竹前文夫・大井恭子 (編) (2006)
クリティカル・シンキングと教育—日本の教
育を再構築する— 世界思想社.
- 柴田義松 (2006) 批判的思考力を育てる—授業
と学習集団の実践— 日本標準.
- 谷川裕稔 (2003) 保育者のためのクリティカル・
シンキング入門 明治図書出版.
- 渡辺健介 (2007) 世界一やさしい問題解決の授
業—自分で考え、行動する力が身につく— ダ
イヤモンド社.
- ゼックミスタ E. B. & ジョンソン J. E. 宮元
博章・道田泰司・谷口高士・菊池 聡 (日本
語訳) (1996) クリティカルシンキング
入門編—あなたの思考をガイドする40の原則—
北大路書房.
- ゼックミスタ E. B. & ジョンソン J. E. 宮元
博章・道田泰司・谷口高士・菊池 聡 (日本
語訳) (1997) クリティカルシンキング
実践編—あなたの思考をガイドするプラス50
の原則— 北大路書房.